常光寺々報
2019/11

報恩講法要

十一月三十日(土)
朝十時半～十二時
昼一時半～四時
京都女子大学名誉教授
本願寺勧学寮頭
講師　徳永　道雄　先生

お昼には、手作りのお斉（食事）があります。

やすらぎ法座……副住職
十二月二十三日(月) 朝十時～

修正会……住職
一月三日(金) 朝十時半～

やすらぎ法座……副住職
一月二十三日(木) 朝十時～

☆講師紹介☆

徳永道雄（釋一道）１９４１年生まれ。大阪外国語大学英語学科卒業。龍谷大学大学院博士課程修了。本願寺派宗学院卒業。本願寺国際センター英文真宗聖典翻訳研究員。ハーバード大学神学部客員教授。京都女子大学文学部名誉教授。本願寺派宗学院講師。本願寺派勧学寮頭。

徳永先生には、毎年のようにご出講いただいていますが、このご縁はめったにないことです。自分のお寺で先生の法話を聞けるという、この度のご縁を大切にしてご聴聞くださいますよう、ご案内を申し上げます。法話は一席一席完結していますので、朝も昼も、ゆっくりお参りください。

劫濁のとき

西欧には、「人は二度死ぬ」という諺があるそうです。一度は、この世に生を受けた者は必ず死ぬわけですが、二度目は、その人を知っている人がいなくなり、その人のことを語る人がいなくなったとき、本当に死ぬのだと言います。

親鸞聖人は亡くなられて七五七年になりますが、それでもまだ生きておられるということになります。聖人の詠まれたご和讃に「**劫濁のとき移るには　有情やうやく身小なり…**」とあります。時代が進めば、世の中は濁り、人間はだんだん小さくなっていくというのです。背丈の話じゃありません。人間そのものが小さくなるというのです。考えが小さくなり、ますます自己中心的になってエゴがはびこってしまうというのです。しかし、そうなれば人は死んだらすぐに忘れさられてしまうのでしょう。

寺　新　報　第3種郵便物認可　第3354号（1、10、20）

一如宝海（いちにょほうかい）よりかたちをあらはして、
法蔵菩薩（ほうぞうぼさつ）となのりたまひて
『二念多念文意』

私たち救うため 姿を現した仏

いのちの栞

普賢（ふげん）保之（やすゆき）
京都女子大学教授

長くなる診察時間

私は20年ほど前から眼科のお世話になっている。以前、ほかの医療機関で少し眼圧が高いから、定期的に受診するようにと言われた。そこで近くの眼科医院を受診した。それ以来、その医院には15年ほどお世話になった。

ある時、そこの先生から「僕、親鸞に関心があるんですよ」と話しかけられた。どうして私の仕事がわかったのかと思いながらも、先生が親鸞聖人に関心を持っているのがうれしかった。

受診するたびに聖人について質問された。先生は夢中になり、検査の手が止まってしまうこともたびたびだった。しばし話した後、我に返って検査を進めるが、声は外に漏れているし、診察時間も長くなり、待合室の目が気になった。

5年前、先生の体調がすぐれず、閉院されることになった。私も転居したのでほかの眼科医院を紹介してもらった。先生は「大学では文学を学びたかった。閉院後は龍谷大学の図書館に通いたい」と話されていた。先生からの連絡を待っていたがなかったので、最近こちらから連絡をしてみると、4年前に亡くなられていた。長い間、連絡を取らなかったことが悔やまれる。

「法話がうれしい」

先生は広島の出身で、小さい頃、おばあさんに連れられてお寺参りをしていたという。「御文章」もいくつか暗記されていて、診察室で披露してくださったこともある。

ある時、先生からご両親の法事を依頼された。大谷本廟を紹介したが、おつとめは私にお願いしたいと言われた。法話を聞いてもらうこと、お斎（とき）の席に着いてもらうことを条件に引き受けた。

先生は、同じ眼科医の奥さんと一緒にお参りされた。おつとめの後、冒頭のご文についてお話しさせていただいた。つまり、阿弥陀如来がどのような仏であるかについて話した。阿弥陀如来は私たちの認識を超えたさとりそのものが、私たちを救うために、法蔵菩薩という姿を現し成仏された仏であることをお話しさせていただいた。「何よりも法話を聞けてうれしかった」と言ってくださり、場所を変えてのお斎の席でも、終始仏法の話で盛り上がった。

先生の、頭を下げたまま法話に耳を傾けておられた姿が思い出される。